

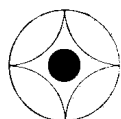
現代日本文學大系

87

堀田善衛
遠藤周作
井上光晴
集



筑摩書房



現代日本文學大系 87

昭和四十七年七月十日
昭和四十八年十月三十日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

堀田善衛・遠藤周作・井上光晴集

著者

発行者

堀田善衛
遠藤周作
井上光晴
井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一一九一
電話東京(一九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10087 (出版社) 4604

堀田善衛集 目次

卷頭写真
筆蹟

齒車

広場の孤独

水際の人

香港にて

三
六
八
五

遠藤周作集 目次

卷頭写真
筆蹟

海と毒薬

黄金の国

二五
一七

井上光晴集 目次

巻頭写真
筆蹟

地の群れ

三五

ガダルカナル戦詩集

二六

眼の皮膚

三三

〔付録〕

堀田善衛論

佐々木基一 三七

遠藤周作の「堀辰雄論」

佐藤泰正 三二

をめぐって

井上光晴論

奥野健男 三六

年譜

三七

著作目録

三六

堀田善衛集

羽
たけぬは空を

飛
ぶべからず

龍
なるばや雲に

乗
らむ
方丈記
も

堀田善備

齒車

人はいう、なにゆえに作者はその人物をハンガリーに行かしたのか、と。率直に作者はこれを告白する。かりにわずかなりともかくすべき音楽的理由を見いだしたとすれば、作者は、他のいずこへなりとも登場人物を導いたであろう。

エクトオル・ベルリオーズ
「ファウスト墜獄」の序言より

一

終戦のあくる年、伊能は上海で中国がわのある機関に徴用された。それは表むきは××文化運動委員会という事になっていたが、つとめて少し時間がたつてみると、文化機関どころか、内実は学生や文化人の思想や動向を調査する査察機関で、おどろいたことには人を尋問し拉致拘禁する権能までもっているらしかった。そういう秘密警察的文化機関であった。そんなこととは知らずに、伊能がむしろ進んで徴用をうけたのは、ひとつには日本にたいし、徹底的な信念をもって抗戦に挺身した、いわば激しい精神の持ち主に会つてみたい、政治というものが全体どのくらい人間の純粹な情熱になりうるものか、そしてそういう人たちがどの程度まで自覚的であるか、とそういうことを知りたいたいという気持がつよく動いたからであった。しかし機関の内実がうすうすわかつてくるにつれて、伊能はしだいにそんな気持をいだいてもしよせんはむだごとに近いということを知らされた。政治的世帯においては、純粹な觀念の持主が決定的な役割を演ずることはほと

んどありえないのだ。一週に二三度、短時間事務所に姿をあらわす主任委員の何大金は、異常な、ほとんど白堊質といつていいほどに青白い、阿片吸引者か変態性欲じやないかとおもわせるやせた男であったが、地下工作の大家であったという噂であった。この主任委員と、いつも彼につきそう秘書兼護身役らしい張愛玲という女性や、伊能の直接の上司の陳秋瑾という女性など、機関に出入りする人びとは、多かれ少なかれ血みどろな地下工作に終始した人びとであるといわれていたが、しかし、いづれもみなどことなく底ふかく汚れた感じで、勝利による慰藉感など露もなく、この種の工作者独特のぶきみな疲労ばかりが目立っていた。もちろん、対日抗戦の勝利などすでに問題ではなく、抗戦最中から彼らの全力が対共産党の内戦に注がれていたことは明らかであった。伊能は、そういう政治のもっとも残酷な機関に徴用されたからには、政治が人間そのものよりも明らかに巨大なものとして映る現代での生き方をそこで見いだそうとでも言えはいえる気持を抱きはじめていたが、周囲のようすから漠然と察せられるものは、生き方とはむしろ反対のもの、殺され方ばかりであることを知り、故国へ帰ろうという望郷の念も、しだいに濁りだしていった。そんな環境で日を過しているうちに、海一つへだてた敗戦後の祖国は、相対立する大国の情報査察機関とその手先の網の目におおわれているかに見えるまで、帰国についてもいはずになれなくなっていたのだ。人ひとり舟一隻も自由に出られぬこまかい残酷な網が四つの島をがんにがらめにしていくかと思うと、もはや彼などの居場所が日本のどこにもないような強迫觀念にかられ、かつは敗戦によって根をたれたような気持がつよまってゆく一方だったので、彼は上海からもっと外へ、外へ外へと、二段も三段も論理を飛びこして自殺の場所をさがしでもするように地球の裏がわへゆく闇航路発見に努力を集中しだした。

委員会での伊能の仕事は、内外の新聞雑誌にあらわれた対日世論の調査であった。仕事が一週間分まると、金曜の午後ぶらりと出勤してくる咽喉のあたりに黒い小さな痣のある陳秋瑾という三十三歳

の女子機関員に提出し、それについての感想を伊能には中国語よりもつごうのいい英語で報告するのであったが、陳女士は仕事にはまるで無関心で、伊能の報告もろくに聞かず、記録はばらばらとめくってみただけですぐにファイルに押しこみ、後は壁ぎわのソファに腰をおろして委員会内の動きを冷然と、しかし人の出入りだけは鋭い視線をきりきりりと動かし、何かをさぐるように観察して夕方になると卒然と帰ってしまうのであった。世論調査などは文化運動委員会の看板にすぎないのだ。金曜ごとにそんなことをくりかえしているうちに伊能のほうでも嫌気がさしてき、かつは中国のあまりにも一方的な対日世論が不愉快でもあり、仕事をするのもバカらしくなってきた。「No report」何も報告することはありません、といって仕事はまったく放りだしてしまった。それでも陳女士は文句もいわず、また仕事と無関係な本を読んでいても、そのころ内戦がしたいにはげしくなつて上級機関員が事務所内に長時間いることもまれだったので、いっこう目立たなかつた。

上海はカサブランカ、リスボン、アルジェなどとともに、いわゆる International Trash 国際的な人間のクズどもが、クズ相応の闇の大仕事を仕でかすに恰好な港であった。伊能はこの港の大倉庫群のあいだにある「血の雨横町」と呼ばれた一画にある、淫売屋をかねた酒場を一軒一軒夜ごとあさりあるいた。ありとあらゆる海洋国のことばで書かれた看板をさげた、それらの酒場は、船乗りの女あさり場であり、また密輸や人身売買・偽旅券などの市場でもあったのだ。

ある夜、伊能はそうした酒場の一軒で、陳秋瑾とばったり出あった。はじめ彼は自分の目をうたがったが、白人船員の気に入りそうな、はでな龍などの模様のはいった旗袍を着ているとはいえ、入口に近いソファに細い足を投げだして掛けていた女をつめたい流し目と咽喉のアザは、どう見てもやはり陳秋瑾のものであった。彼女は一瞬きらりと探照燈で照らしつけるような眼ざしを投げたが、無表情なまま、伊能のテーブルへ猫のように足音もなくやってきて、何と何との混血なの

か、えたいの知れぬ女たちを追いはらつた。目の前にだまって坐ると、彼女の背後にある委員会のナゾのような組織の網が急激にきりきりとしぼりあげられるような気がして伊能は鳥はだ立ったが、ちょうどその日の午後、目抜きの大通りで中共のスパイだという学生が後頭部にピストルを打ちこまれる残忍な光景を目撃したばかりだったことが逆作用して、真剣になっておのれの企図を洗いざらい低声で話した。ところが彼女は伊能の話に一見無関心なように黙々と聞き入り、新来の客があると入口の方をじろりとながめるばかりであった。伊能はあまりにも反応がないので拍子抜けしてようやく落ちつきを取りもどし、彼女の本務があつた対日世論調査などではなくて、この酒場にこそあるのだ、そうならば危険な意図をいだく以上は、この危険な女を味方にする必要があると気づくまでに我にかえた。彼が話しおえると、陳秋瑾は張りのない胸部に疾患のありそうな顔の皮膚をゆるめて、

「You, dangerous……」

あぶない人ね、と針をふくんだような、重慶なまじりと思われるアクトのつよい英語を咽喉の奥でつぶやいた。彼女はものうげに伊能のコップにビールをそそぐと、

「きょうはもうお帰りなさい。これからもこの横町へ来るなら、この酒場以外へ行ってはいけませんよ、あぶないから。」

そう言って手をさし出した。彼女の手は顔つきから想像した以上にあたたかく、彼を見送る視線は、会話中の無関心さとはうってかわつた、微妙な、何らかの理解とあわれみとをふくんだ微笑に近いものがあった。

彼女は伊能の企図については「あぶない人ね。」と言っただけで何の感想ももらさなかつたが、伊能はそれ以後倉庫のあいだの横町へ行くことはやめてしまった。そこにもまた文化運動委員会は完璧の網をはって完全に遮断されてしまつているとしか思えなかつたのだ。彼は事務所へ行くこともおこたりがちになり、病氣だといつわつて何日も何日も天井をながめて暮した。

——とんだ文化運動だ！

とそう仰むけに寝てつぶやいてみると、戦争や革命がそれ自体平和であり世界であるような現代においては、このとんでもない文化運動こそ最も知的な、しかも最も行動的なものではないか。Intelligence service というゆえんか……と、そういうたゆがんだ感想すら浮かんで来て、絶望するために必要な情熱さえわかぬという暗いくぼみへおちこんでいった。

「とんだ文化機関だ！」

吐きだすようにもう一度声に出してつぶやいたとき、階段を上がってくる靴音が聞えた。かたい皮靴の音であった。彼の間借した家の中国人老夫婦は皮靴をきらっついていつも手製の布靴をはいていたのだ。やがて伊能の部屋の前で靴音はとまり、

「イーノ！」

という女の声があった。明らかに陳秋瑾の声であった。戸をあけるとあいさつもしないでつかつかと入ってきて手にもった小さなトランクを床に置き、

「臭い、臭い。」

と言いながら壁ぎわに身をよせ、片手で窓をあけて通りを鋭い目つきで眺めわたした。

目でちよっと合図をしてから彼女はもって来たトランクを寝台の下へ押しこみ、どうして例の酒場へも事務所へもやって来ないか、日本へ帰りたくなつたのだろう、病氣は懐郷病ではないか、などと質問したが、いずれにも伊能は答えなかった。然りと答えてみても否と答えてみてもどうなることがらでもないし、陳秋瑾の問いもさして答えを期待したものでないことは目色で明らかだった。話途中で彼女はふたたび寝台の下からトランクを引き出し、わざと中身を見せるようなぐあいにはひらいて底のほうからウィスキーの小ビンを取りだし、テーブルの上に置いた。トランクの中身は、あきらかに寶石箱と思われる小箱やハンケチにつつんだ貴金属らしいものであった。

伊能はたてつづけにウィスキーを飲んだ。そしてビンが半分ほどになったころ、陳秋瑾はいくらか酒にうるんだような目つきで、

「伊能、あなたは中国共産党にだれか知った人がいるでしよう？」とたずねた。伊能はいよいよはじまったぞ、と思ったが、たずねた陳女士そのものは冗談のように、にやにや笑っていた。

「さあ……」

と伊能は口ごもった。この答えがおかしかったか彼女はふっふつと老女のようなふくみ笑いをもらした。事実、戦中戦後にかけて、彼はさまざまの中国人その他と知り合いになったが、一体だれがどの党を信じどんな思想をいだいているかなどということは容易にわかるものではなかった。一口話してすぐにいだいている政治思想がわかるというような人は、真底からのテロリストかよほど平和で安全の保障された国の住民であろう。

「まずないと言うより仕方がありませんね。」

陳女士はふくみ笑いをこらえかねてか、いくらか声を出してまで笑い、笑いおえるとさっと立ちあがり、

「ときどき事務所へも出ていらっしやい。」

と言って再見とも言わずに出て行った。トランクは寝台の下においたままであった。やがて彼女は三日に一回か四日に一回、時には夜中にもやって来てそのたびごとに一つか二つずつ鍵のかかった小型のトランクや書類カバンをおいていった。伊能は彼女のなすがままにほうっておいた。これらの荷物が安全無害のものとはとうてい思えなかったが、しかし拒絶してみたところどうなるか。

ある日の午後、彼女が珍らしく手ぶらで——横に長い大きなハンドバッグにウィスキーの小ビンを入れただけでやって来たとき、伊能ははじめて彼女の仕事に立ちいった質問をしてみた。

「ええ、だけれどもそろそろ大詰めよ。このつきはあなたの……番よ。」

あなたの……何の番なのか聞きとれなかったので聞き直すと、彼女

は西洋人ふうに肩をすくめて笑っただけで何も言わなかったが、その態度はよほどうちとけていた。伊能と陳女士がウィスキーをなめザクスカをつまみながら交す会話は、政治にかんすることは両方とも注意深くさけて大部分は文学や美術にかんするものであった。そしてそれを話している限りは、その話題はいつか知らず知らずのうちに伊能と陳秋瑾という、恐ろしくかけはなれた存在をいくらかは一つの流れのうえにのせてくれるのであった。とはいえ、たまたま話が中国の現代文学にうつってゆき、林語堂について伊能が何か言ったとき彼女はふつに、

「That foreign Chinese !」

ふん、あの外国中国人め！ と吐きすてるように言ったことが深く伊能の頭に残った。母国では生きられない、生きるにたえない中国人フォリン・チャイニーズということばは、顎の細い、のっぺりした林語堂の面影をありありと描きだしていた。左右両翼からいれられず、ニュー・ヨークの高級アパートに住んで、めったに帰国せぬ世界的文人林語堂の運命——そういったことを伊能が考えていると、陳秋瑾は吐きだすような今の調子とはまるで違った、低い声で、

「だけど、母国でだって、生きてゆくことは大変ですわ、今のような時代には。」

彼女は伊能の目をまともに見つめた。外国に脱出するという伊能の意図が、どのくらい真剣なものなのか、念を押すというような、何か迫るようなきつい視線であった。伊能は黙りつづけたあげく、

「しかし外国に出たからといって気楽なはずがない」

と言うと秋瑾はすぐにうけて、

「今のあなたのようにね。しかし母国にいても外国にいるような気持で生きなければならぬ人もいます」

広い額には油に光った簾髪かたがみがそれこそ簾のように一本一本そろっていたが、切れ長い幾分つり上がった目には、しかし嘆きなど影もなく日本の女性にはめったに見られぬ鋭角のものが光っていた。

Foreign Chinese と言われれば伊能の頭には Foreign Japanese

という言葉がすぐに浮かび、それにつづいて何物か最も大切なもの——口に出して言えば祖国といった堅いことばになるしかないような存在——にたいする betrayal 裏切りということばが、霧のように頭の中にたゆたって去ろうとしなかった。伊能は目をあげて秋瑾の顔を見た。彼女が伊能と同じ物思いにふけていたとは思われぬが、伊能の視線に出会うと薄青い静脈の筋の浮かんだ臉おもてをしずかにおろし、またしばらく沈黙がつづいた後で、ぼつりぼつりと彼女がその母国にいられぬようになったゆえんの、身上話のようなものを語りだした。

「わたしは人を殺したことがある女です、直接手をくだして殺したことはまだないにしても、結果としてわたしに殺したことにまちがいありません。もちろんわたしは、こんな××文化運動委員会などにはじめからいたのではありません。わたしの本職は、軍統——ご存じでしょうが、正式の名前は軍務委員会調査統計局で、抗戦中にできた黒衣社系の対日本および対共産党の特務工作機関です——その軍統の特務工作員、略して特工というあれです。」

……どこからお話したらいいか、全くこの政治というものは、頭も尻尾もなく、敵だ味方だといってみたところで、結局は敵味方が相対的に歯車のようにがっちり食いあったうえで、政治にとってただ一つ絶対に必要なもの、血と肉をもった人間をがりがり食って生きているのですから、どこをどうといて切りようもありませんが——そうでした、わたしが特工になったころ、日本はシンガポールを征服し比島を奪略し、南京には外見だけでもとにかく政府みたいなものができるし、国共の合作はとくに破れ、特工も買収されたり同志で殺しあったりで悲観的な空気がただよい、しだいに腐敗がひどくなってゆきました。対日本、対共産党どころか、対内監視が特工の一番大きな仕事になりかけていました。安全な人など一人もなく、連合軍勝利の見通しははっきりして来てからも、こうした陰惨な空気はいっこうに改まりませんでした。」

陳女士がそこまで話したとき、「伊能さん。」と窓下で呼ぶ声がした。彼女は、つと立ってふたたび窓ぎわの壁に身を寄せ、「あなたのところへ遊びに来る人があるのねえ。」とおどろいたように言い、「ああ、あの買さんだわ、ちよっと行っていらっしやい。あなたを外へ出たらその後でわたしが出ます。そして今夜も一度ここへ来ますから。」

伊能はしかしあまり行きたくなかった。というのは賈青年は伊能と机を並べて仕事をしていたのが、近ごろ辞職して故郷の満洲へ帰ると言いだしていたのだが、彼の辞職の原因は、ほかならぬ伊能自身にあったのだ。事務所の会計係が職員の給料をにぎって銀行利子をかせぐために、明日払う、明日払うといって遷延しているので、下級職員が生活に困り、それでも文句も言えないでじっとがまんしているのを見かねた伊能が、これ以上悪くなりつこない捕虜同然な身の気やすさを利用して、賈青年と会計にむかって面罵めんばしたことがあった。

「微用しながら給料も払わぬとは何事だ、こんな政府があるものか、こんなものは政府でも何でもない、どろぼうみたいなものだ。」

という意味のことをもっとひどいことばで言い、下級職員たちの窮状をもついでに言ってやったのである。会計はぬらりくらりと逃げたが、賈青年は負けた日本人伊能にこんな言われたことを深く恥じて辞職してしまったのであった。「満洲国」新京の師範学校から広島文理大へ留学した賈青年は日本人の気性をよく知っていた。

「お別れに来たんですよ。いよいよ近く発ちます。」

中国人インテリとしては珍らしく真黒に日焼けのした背の低い青年は、酒屋の細い腰掛けに腰をおろすと、白い清潔な歯をむきだしてそう言ったが、それになりたい伊能は明瞭な返事ができなかった。彼の故郷の満洲は内戦の真最中で、それでなくても日本側への協力者であったらしい彼の家族などはどうなっているかわかったものではなかった。

「そう、それは……」

とまで言ううと賈青年はすぐにひきとって、

「東北（満洲）は大へんだ、とおっしゃるのでしょう？ それは大へんですが、僕はいいい紹介状をもらいましたから大丈夫ですよ。」

「それならいいが。」

近ごろの伊能は、寝ていてもいつか自然に心臓の鼓動が早くなるほどに、何らかの意味で政治に身をまかせ、どちらかを選ばねばならぬ人間というものの在り方が彼に底深い恐怖と感動を与えるのであった。「その紹介状をだれにもらったと思いますか？ 陳秋瑾女士からですよ。」

秋瑾は賈青年にとっても上司であったが、いかに彼女でも今さら国民党系の人を紹介したとは思えなかった。

「それで……」

「それで、ある人に何度も会ってその人からまた紹介状をもらったのです。」とまで言ううと賈青年は声を低めて、「東北人民政府の上のほうへね。」

「それはよかった。」

とは言いはしたものの、伊能は腹の底からよかつたと思ったわけではなかった。このことばじりは知らずしらずにごってしまった。青年は敏感に伊能の心中を察して、

「ですからこれ以上心配なさらないでください。ところで」と言って彼はまた声を低めた。「来ていたのでしょう？ 陳女士が？」

伊能がしずかに杯をあげると、

「あなた、ウイスキーの匂いにするからわかりましたよ。陳女士はウイスキーが好きですからね。いいんです、心配なさらないでください。あなたには言ってもいいと思いますが、僕はその、陳女士が紹介してくれた人、魏克典という中共の人ですが、この人から頼まれているのです。当分陳女士の身のまわりをもそれとなく気をつけて上げ、別れぎわに青年は伊能の手をしっかりと握って言った。

「僕はあなたに中国をのしられたおかげで別の中国へ行くふんざりがつきました。またお会いできるかどうかわかりませんが、あなたのこととは忘れません。伊能さんも成功されるよう祈っています。」

別れて陳秋瑾の帰った後の屋根裏へもどっても、伊能は自分が一体どうすれば「成功」したことになるのか、全く見当がつかなかった。ともすれば目に見えぬ両方の陣営から同時に追及され審判されて自殺するのが「成功」と思えるような暗い淵のまわりをさまよっているおのれの姿が思えがかれた。賈青年は伊能にのしられてふんざりがついたという。これもまた考えてみれば恐ろしいことではないか。下級職員のためと思つて、気楽な身分を利用して抗議しただけの、この小さな行為が、それだけが原因ではないにしてもすでに一つの波紋を起しているのである。賈青年は選択したのだ。

長い夕照もようやく尽きて暮れかけた九時近く、陳女士の来るのがおそいので、夕食を取り出ると、途中タクシーに乗った陳秋瑾が呼びとめた。迎えに来たのだ、と言う。座席に坐るとすぐに、

「賈さんは中共の魏克典という人の話をしたでしょう？ その克典さんがどの程度運んだかもたしかに……」すべては筒抜けなのだ。そして好むと好まぬとにかかわらず、人は危険な人びとと結ばずには何事もできない。彼女は伊能のほうは見ずに暗い通りをまっすぐに見つめてひとりごとのように話した。

「この魏克典という人には、ひどい目にあわれました。いまでもときどきいじめられています。」しかし彼女の声にはいっこうに憎しみの調子はなかった。むしろいじめられることを楽しんでいっているようにさえあった。「この克典さんは、わたしたちの学生時代の友人だったのです。あのころわたしたちは抗日救国学生運動を組織し、克典さんはその秘書長でした。わたしたち、いえ、わたしたちわたしたちと申して来ましたが、そのころわたしには黄という愛人があって、この人と同棲して二人とも工人会のオルグとして労働者獲得のために

努力していました。わたしにもこんな時期があったのです、もちろん共産党系の運動でした。それが後日、突然政府の弾圧をくって、克典も愛人の黄もわたしもみな逮捕されてしまいました。一時はどうなることか、と心配しましたが、さいわい克典さんの親御が運動してくださり、三人とも一応転向ということにして出してもらいました。今になって考えれば、克典さんも、もちろん黄もいわゆる偽装転向にすぎなかったのです。出獄してすぐ克典さんは女学校でわたしと同窓の小黛という金持のはねっかえり娘と結婚し、運動とは一切手を切ってしまったように見えました。そして黄は出獄するとすぐ、一時行方不明になりましたが、ある晩ふらりと帰って来ました。そのときはもう、わたしは国民政府が合法的な政府である以上、そしてそれが抗日が一切に優先すると宣言している以上は、共産党と手を切つて戦うのが正しい。抗日の道に二つはないはずだ、と決心してしまっていました。わたしは単純な女なのです。ところが黄は頭ごなしにそんなわたしをどなりつけたものです。どなられてわたしもかっとなって言いました。

「だってあなたも転向を誓ったじゃありませんか。」

「あんなやつらに何を誓ったところが誓ったことなんかになるものか！」

と、こういう戦法で反撃して来ました。それでわたしと黄の仲もおしまいです。わかれてしまいました。いよいよわかれるとき、妙に不自然に胸を張って黄はこんなことを言いました。

「抗日なんぞはわかりきったことだ。しかし現代のような時代では、右翼であるか左翼であるか、とにかく立場の鮮明でない人間、中間的な第三者などは人間ではない。もちろん中間的な人間のほうが大多数だが、これをひきいて立場を鮮明にさせるのが、彼らを人間にするみちなのだ。君のように脱落してゆくやつなどは、最も唾棄すべき敵だ……」

そこまで一気に言うと、いくぶん声をおとして、

——しかしまあ、僕らにも共通の理想にもえた日々があったことだけは、おたがい忘れぬようにしよう。」

それから長いあいだ、長い長いあいだ克典夫妻の消息も、もちろん黄の行方もわかりませんでした。何でも黄は延安に、克典夫妻は重慶にいたるといふことは風の便りに聞きましたが……

運転手は車の輻輳する通りへ乗り入れ、警笛だけではたらぬと見えまなく英語でしゃべりつづけている奇怪な中国人、この男と女は何者なのだろう、とでもいうふうになりかえって見た。陳女士はユダヤ人の宝石店の前まで来ると車を止め、すたすたと店に入って二、三分し出てきた。車へもどって来たときの彼女は、さっきの回想にふけるといった表情を拭うように去って、車台上に足をかけるときも鋭く左右を見まわした。車が動きだしてからまたしばらく沈黙がつづいた。

「黄……そう、愛人の黄とわかれてからのわたしは、身の平均をうしなつて暗い地獄へ一直線です。わかれた直後、Zという、今思つただけでもぞつとするような男が現われて、中華全国で一番働きのいい仕事についたらどうだと言ってくれたのです。それがこの特工の仕事でした。この世界は入りたつたらもう出られません。出口なしです。もがけばもがくほど深くはまりこんでゆくだけで、仕事も仕事なら、しまいには重慶でこのZという男と結婚するほどにさえなつてしまひました。もちろんすぐに別れましたが、その当時からわたしの直屬上官が今の文化運動委員会主任委員の何大金なのです。特工というものは死ぬまで転勤ということがありません、たとえ部署が変わつても、つかまつたらもう一生です。——Zとの生活から逃れるために上海での任務をもらつて奥地を離れました。上海へ来て、中共、国民政府、南京偽政府、日本軍とこの四つが、だれにしても決してたどり切れないほどにもつれあつた網の結び目にいる要人を一人一人狙いうちする工作に、もう全身、うちこみました。ときどき黄や克典のことが思ひだされると、わたしは彼らを裏切つていゝのではないかという、胸を突き

さされるような苦痛を覚えました。この苦痛からまぬがれるために、緊張して工作にはげんだものでした。中共のアクティヴな人は別として、国民政府側にしても南京偽政府にしても、また軍人以外の日本人にしても、これらの重要な結び目にいた有能な人は、ほとんど全部といつていくらい、左翼からの転向者でした。そしてそれになう特工もまた勤勉で忠実な人は、これまたたいていは転向者でした。転向者というものはどうやら必然的に元来のものの敵になる運命にあるようです。そうした要人の何人かを、ワナにかけて狙いうちました。何のために、などとあなたは問ひもなさいませぬ、やがて手ひどい、痛烈な復讐がやってきました。それでなかつたら、伊能、あなたと一しょに車に乗るなんということもありえなかつたでしょうから。

ちやうど、あなたとあの酒場ではつたりぶつかつたように、抗戦末期のある日、G書店にゆくとそこで例の克典に会つてしまつたのです。このG書店というのは、日本軍占領下の上海でたつた一軒、店の奥に非占領地区で出版された本や雑誌を秘密裡に置いてある店でした。がんらい、本や雑誌は十把一からげに左翼的なものと見なすという方針でしたから、このG書店も日本憲兵と競争でわたしたちの監視下にあつたのです。ところがばつたり顔をあわせても、克典は知らぬ顔をしていゝのです。もちろんわたしも知らぬ顔。そのうち克典のほうが出ました。やはり以前のようになつたりをひいています。わたしは斜行型をとつて尾行しはじめました。克典は十分くらいは尾行されていることを全く気づかぬようでした。物珍らしそうに右を見、左を見て歩いてゆくのです。それでわたしは克典がつい近ごろ奥地から上海へ下つて来たのだな、と感じはしたものの、人違いじゃないか、などという疑念もわきました。ところが、ある曲り角まで来るとふいに見えなくなり、わたしがあわてて人込みの中へとびこんで、まごまごしてると、うしろからぼんと肩を叩かれました。やはり克典です。にやにや笑つてさえいました。これは相当な訓練をつんでいゝな、と

直感しましたが、わたしもそんなことはけぶりにも見せず、大仰な表情をつくって、

——まあお珍らしい！ 奇遇ね！ まあ……何年ぶりでしょうかしら。」

とか何とかとあいさつをし、そこは女の特権を活用して克典には一言もはさせないで、奥さんの小黛はどうしていらっしやる？ 一段とおきれいにおなりでしょう？ いつこちらへおいでになりました？ 旅行はさぞ大変でしたでしょう？ お仕事はいかががですの、何をなさっていらっしやいますか？ とまずこんなようなことをたてつづけにべらべらしゃべりまくりました。

なぜ旧友を尾行したりするのかとおっしやるのですか？ わたしたちは、それはもうだれかれかまわずに尾行しますよ、同志の後でもつけますわ。どうせこっちも尾行されているかもしれないし、それに克典も一応転向者だっただけですから、やはり監視しなければなりません。わたしはがしゃべりつづけても彼はいっこうに毒気を抜かれたようすはなく、にこにこしてこれから映画の試写会へゆくんだが、一しょに来ませんか、と言うのです。何年ぶりかで会ったのに映画の試写会へ誘うなんて変です。これでわたしは彼がきっと共産党か南京偽政府か日本か、このうちどれかのために働いているな、と感じとりました。要するに一人では大刀うちできないので、試写会という人だかりの中へつれこもうというのでしょう。もちろんわたしの正体をむこうが知っているということはこのさい予想しなければなりません。克典は、妻の小黛も来るはずだから、と言うのです。わたしも彼と二人きりでは、双方とも針をのんだままでいるならいいのですが、一方がちくりと刺して来たばあい、別れて久しいのですから刺しかえさずにごまかして通るだけの共通の話題にとぼしいでしょう？ ですからおっちょこちょいの女学生だった小黛がいれば、まぜっかえしながら思わぬ収穫があるかもしれぬと思って試写会へ行くことにしました。会場までの車中、わたしはおのおのうしろ暗い過去のことよりも映画や文

学の話題をえらんで、

——どんな本をお読みですか、こんな占領下の上海なんかにも何か読むにあたいするものがありますかしら、G書店で何か見つかりました？」

と、あわよくば思想的な動向をさぐるうとて水をむけましたが、

——さあ……」

と言ったきりで、よほどたつてから、

——僕はこのごろ古いものを読んでいますよ、イデオロギーにも飽きましたし、何しろ経史書集といったって僕なんか学生時代以来古典輕蔑論にわざわざいわれて見たこともなかったのですから。」

としんみりした口調で言いました。まんざらわたしの質問をそらすただけではなさそう、わたしも、つい釣りこまれ、ああそうだ、自国の古典ぐらい知っていなければ、と思つたほどでした。そう思つてみると、彼のいかにものびのび育つた良家の子弟らしい顔つきにも、どこことなく憔悴したような暗い影がありました。

こんな会話をしながらも、わたしは一生懸命に考えていたのです。映画の試写といえ、当時上海には中日合辦の中華電影公司しかなかつたのですから、映画はいずれ漢奸どもの作つたものにきまつています。克典の妻の小黛なら日本人におべっかを使うぐらいするかもしれないませんが、あの克典がそんなことを——それに克典とて、たとえおぼろげにはあつても、わたしの正体を知っているらしいのになぜぬけぬけ誘つたりするのか？——しかし、あたしも映画の試写会などといういやらしいところへ得々と出てくる売国奴どもの顔を見ておき、敵の文化界に一通りの顔をつくっておくことも悪くない、とまあ、この方向をきめて、べつに對策や戰術、とくに退路のことも考えないでいました。

会場へつくと、克典とわたしが一しょに来たのを見て、さすがに小黛はもの言えぬくらいおどろいたようでしたが、たちまち彼女一流のおしゃべりをはじめました。

——まあ秋瑾……まあおさかななことね、御身分といい何といい、腕のきく方は違ったものだわ。わたしたち太平洋戦争のはじまるちょっと前に香港からシンガポールへ逃げたのよ。シンガポールから重慶へもどるまでの苦勞といったら、それはもう……重慶へ帰っても同じき同然、おちぶれるとだれも相手にしてくれないのよ。それでまたこじきみたい上海へ流れて来たのよ、よろしくお願ひしますわ。でもほんとにまあ、あなたは美しいし、働きもあるし、うらやましいかぎりだわ……」

あいかわらず、とわたしは思いました。小黛はバカです。(なかなかバカでないことは後にわかりましたが)、とにかくこれでもう克典、小黛の二人で香港、重慶、シンガポール、上海との四つの地点を結ぶ何かの仕事についているということが手にとるようになつてしまつたわけです。そしてこんな試写会などへ、上海の上流階級との連絡があるいは、カモさがしに来ているとすれば、何の仕事か大體の見當はつきます。日本と南京偽政府関係の和平運動か、でなければ中共の華僑工作かです。

話しながら克典の顔をちらりと見ました。彼はにがりきつたような表情でバカな妻の背中をつついていました。やがてあきらめたようにどこかへ行つてしまいました。

映画は、ドストエフスキーの『罪と罰』を中国流に翻案した『恋之火』というくだらないものでした。しかし見ているうちに……突然はッと思をのみました。

主人公のラスコリニコフにあたる男に扮した俳優が、じつに……黄あ、黄に似ていたのです。暗闇の中でわたしはラスコリニコフの、いえ、黄の運命が思いやられて息をするのさえつらくなつて来ました。『私情でつらくなつたらその相手を戦術的に疑え、疑ひ抜いて切り抜けよ。常に悲哀をほらえ。哀感は裏切り行為のさきぶれだ。』というのが特工の戒律、あるいは生活的な戦術の一つです。わたしは数年来地下にもぐつたきりで全く消息のなかつた黄と、近ごろの中共関係の

事件を結びつけたり切りはなしたり、映画はただ目だけにまかせ、頭の中では一生懸命代数でもやるつもりでこのつらさを乗りこえるにたる答えをさがしていました。映画はしだいに進んでラスコリニコフの親友のラズミーンが気がいが同然のラスコリニコフにいろいろ親切にしてやるところへさしかかりました。わたしは——またはッとして気づきました。ラスコリニコフが黄なら、ラズミーンは、克典ではないか。克典がこんなに深く日本、偽政府、それに、もしかして、こちらがわの特工にまで食いこんで何かを企図しているとしたら、むかし一しよに運動をやっていた黄がかならずどこかそこらにいるに違いない！

冷たいものが背筋を走りました。わたしは特工の仕事に深入りしたはじめのころから、いつも漠然とした恐怖をもちつづけていましたが、そのときはじめてこの恐怖の正体を見せつけられたのです。いつかは『共通の理想にもえた』あの黄と殺しあわねばならぬのではないか、という、これがその恐怖の正体なのです。

画面では金貸しの老婆を殺したラスコリニコフはしだいに外からも内からも追いつめられてゆきます。しまいにはある高い、あるいは虚妄な理想に憑かれたラスコリニコフを追いつめていけるのは、検事でも判事でもなくてほかならぬこのわたしではないか、とそんなふうにしてきて座席にじつと坐つていらなくなりました。そつと立つて近くの席にいたはずの小黛に先に出る——と言いかけてわたしはまたぞつとしました。席にいたのは、小黛ではなくて薄暗い試写室ではつきり見えなかつたとはいえ、まぢがいなくあの愛玲なのです。主任の何大金の秘書兼護身役をしている、女特工の愛玲です。何となくワナにかかったように思われました。愛玲は画面から目をはなしてじろりと冷たくわたしを眺め、物も言わずにまた画面のほうへ目を転じました。しばらく廊下の椅子に腰をおろしてぼんやりしていました。白々とした外光の中へ出ると、暗闇で見たラスコリニコフ、いえ、黄の面影がなまなましく目に浮かび、乳のあいだにぐっしり汗をかきました。

『罪と罰』だ、と心からそう思わないわけにゆきませんでした。そろそろ罪が罰にかわる時期にさしかかっていたのです。

しかしなぜ、と氣持の立ち直るのを待って、自分で反駁してみまじした。特工としての心構えにかえって。なぜそんなに黄のことが氣がかりなのか、と。けれども考えれば考えるほど、特工も共産党も理想もそんなことはどうでもいい、ひたすらただの人間、理想や政治のためにこわばっていない普通の人間、監視したりされたり追放したりされたりもすることのない……そういう人間をひたすら求めている、ただそれだけの自分に氣づいて一そうみじめな気分につき落されました。恐怖という神様にも似たものにあやつられて今この世に、そんなふうな普通な人などがいようはずがありませんもの。

あのころの黄は、イデオロギーにこりかたまつた、人間だかイデオロギーの化け物だかわからぬような人でしたが、しかしよくよく考えてみれば、わたしが愛し信じていたのは、そんな彼ではなくて、たとえば夕御飯を食べるときなどに胡椒にむせて低い鼻に皺をよせ、ごほんごほんとかをやる、そしてわたしが背中をさすってやる、そんなときの子供らしさのまだ残っていた黄なのでした。やはり彼の思い出しは、政治や思想——中原の逐鹿はいざ知らず、中国の天の涯にある、天山にかかった白い雲のように、消えがてに消えかねるものがただよっていたのです、たとえ自分がどんなに汚いはずかしい仕事に手足もろとも首までとっぶりつかっていようとも、天山の上のことは、いくら特工でも手も足もおよびません。

椅子から立って人氣のない廊下でエレヴェーターを待っていますと、うしろから克典がやって来ました。

——もう映画はすみしましたの？」

——いいえ、まだですが、ちょっとお話ししたいと思ったのですから。

克典の目は全然笑っていません。むしろ緊張しきって、どうしたらやわらげ得るか、と努力しているようでした。それを見てわたしは直

感しました。もう事ははじまっている、何か克典と黄関係のことが……と。エレヴェーターが上がってきて戸がしまる寸前、廊下の曲り角にちらりと花模様の旗袍が見えました、愛玲です。ハンドバッグの止め金をパチンといわせて姿を消しました。特工仲間の愛玲がもういち早く何かかぎつけて楔をうちこんで来たのです。

すぐに車をひろって克典とわたしは法国公園へゆきました。エレヴェーターから車の中。そして公園の茂みの前のベンチに恋人然と坐るまで、二人とも無言でした。沈黙は特工にとっては一番の禁物なのです、……沈黙は刺殺か射殺のときになってはじめて必要なのですが、そのときはどうにも重苦しくてわたしも口がきけなかったのです。黙ってわたしは祈っていました。克典の話というのがどうか黄のことではありませぬように、どうか元氣で活躍していてくれるように、しかしあまり元氣すぎるといつかは、わたしたち特工の手にかかることがあるかもしれませんから、どうかあまり元氣すぎないように、中共解放区から外へ出ないように、とそんな矛盾したことを、しかし心の底から祈っていました。克典は目を伏せて胸や頭の中の悩みをどうかしようともいふうに、跛をひく右足の膝をさすっていました。

——中国は……暗いですね、いつになったら……
 というのが克典の最初のことばでした。大げさなことを言いだしたものだ、とふと氣づいて、あんまりしんみりしてしまっただけはない、わたしは特工なのだ、と改めて思いなおしました。旧友の克典と出会い、『罪と罰』の映画を見てからというもの、妙に切迫した哀感がたちこめてきて急速に特工意識が薄れてゆくようなのです。

——しかしむかしは、おたがいに中国は、中国は、とか、占領されてしまうということは人間まで腐らせる、とかと御題目のように言って暮したこともありましたね。」

そう言ってますますいけない、と思いましたが、克典はその話に乗ってきて、

——それで今はどうなのです、もう中国は、中国は、とは考えませ